

# 日本伝統スポーツの文化資源化に関するスポーツ人類学的研究

—運動体としてのスポーツの運動力に着目して—

小木曾 航平\*

田邊 元\*\*

## 抄 録

本研究では、日本の伝統スポーツの現状をスポーツ人類学的手法で解明し、その文化資源化に向けた理論的視座を構築することを目指した。特に、伝統スポーツの担い手の視点から、彼らの生活とスポーツの実践がどのように交錯し、関係を取り結び、日常的な生の在り方に資するのかを調査・分析した。その際、「運動力」、「運動体」などの独自の概念枠組みを導入して、人と社会と伝統スポーツの関係を現代日本の地域社会という文脈の上で多角的に検討している。今後、本研究の具体的な成果は、対象となった伝統スポーツを過去（歴史）と今（地域性）の相互関係の上に位置づけて、そのスポーツの文化的側面を民族誌（ストーリー）としてまとめ上げていくことで最終的な結論を得ることになる。本稿はその中間報告的意味合いを持つ。

調査研究の対象は日本の伝統スポーツの中でも、とりわけ地域社会が熱心にその保存と継承に取り組み、現在もその多様性を維持している東北地方の2つの伝統スポーツである。1つは岩手県久慈市山形町で行われている「平庭闘牛」で、もう1つは秋田県秋田市で行われている「竿燈」である。本研究から、平庭闘牛と竿燈という伝統スポーツの生み出す運動力が、当該地域に新たな関係の網の目を形成させていることが明らかになった。それらは、都市と地方を結び、移住者と地元民を結び、人と自然を結んでいく。現在の日本社会においても、伝統スポーツは人と地域社会を媒介し、関係を取り持つ力学を失ってはいなかった。むしろ、人がそのように伝統スポーツを捉え直すことによって、その文化資源的可能性はさらに拡張していこう。スポーツ人類学的手法によって、こうした社会に対するスポーツの捉えがたい作用を民族誌として具体的に提示することで、文化としてのスポーツが我々に与える潜在力とその価値をますます可視化していくことができるに違いない。

キーワード：東北地方、平庭闘牛、竿燈まつり、運動力、ネットワーク

---

\* 早稲田大学スポーツ科学学術院 〒359-1192 埼玉県所沢市三ヶ島 2-579-15

\*\* 富山大学芸術文化学部 〒933-0981 富山県高岡市二上町 180

# Sport Anthropological studies concerning Japanese Traditional Sports as Cultural Resources

–Focusing on motility agency of sports as motile body–

Kohei Kogiso \*

Gen Tanabe\*\*

## Abstract

In this research, we aimed to elucidate the current situation of Japanese traditional sports by sport anthropological method and to build a theoretical perspective for cultural resourceization. The research subjects are two traditional sports in the Tohoku region in Japan. One is "Hiraniwa Bullfighting" which is played in Yamagata Town, Kuji City, Iwate Prefecture, and the other is "Kantou" which is being held in Akita City, Akita Prefecture. People in Tohoku region has been safeguarding and preserving their traditional sports enthusiastically and then still maintaining its diversity.

Based on the perspectives of the bearer of these two traditional sports, we investigated how their lives and sports practices intertwined, connect each other and contribute to their daily way of life. At that time, we are considering the relationship between people, society and traditional sports in a multi-faceted context of modern Japanese local community by introducing our own conceptual frameworks such as "motility agency" and "motile body". In the future, the concrete result of this research will be presented as ethnographies in which we will analyze cultural aspect of these traditional sports by focusing on the relationship with their history and locality. Therefore, this paper is an intermediate report of this study.

From the present study, it became clear that the motility agency produced by the traditional sports of the Hiraniwa Bullfighting and the Kantou has formed the new network in each local community. They connect urban areas and local areas, migrants and locals, human and nature. Even in the present Japanese society, traditional sports mediated people and community, and did not lose the dynamics of relationship. Rather, as people recreate traditional sports like that, their potential for cultural resources will further expand. Of course, it is difficult to see sports have these social functions. However, by using sport anthropological method, it will be increasingly possible to visualize those potential and value of sports cultural function.

Key Words : the Tohoku region, Hiraniwa Bullfighting, Akita Kanto Festival, motility agency, network

---

\* Faculty of Sport Sciences, Waseda University 2-579-15 Mikajima, Tokorozawa, Saitama, 359-1192

\*\* Faculty of Art and Design, University of Toyama 180 Futagami-machi, Takaoka, Toyama, 933-0981

## 1. はじめに

### 1. 1. 研究の背景

まずは近年スポーツやアスリートが原因と考えられている日本の社会問題について挙げてみる。運動部活動における体罰、選手が関与した違法賭博、ドーピング、Jリーグにおけるレイシズム、五輪招致に関わる不正疑惑。しかし、どれも目新しい問題ではない。スポーツ界が長らく解決することのできない倫理的問題である。この倫理的問題は、スポーツに関わる主体たちが属する排他的かつ閉鎖的コミュニティにおいて構造的に再生産されている。一方でスポーツが青少年の人格形成を促し、地域社会の再生に寄与し、健康で活力に満ちた長寿社会を実現するのに不可欠な文化であるということは自明の事として了解されているようである(スポーツ庁HP)。現実と理念の間のこの隔たりを看過することはできない。

本研究はこうした日本のスポーツ界の現状に、“文化としてのスポーツの矮小化”が関係していると考え。確かにスポーツを通じた人類の限界への挑戦は、社会に活力や豊かさを与えるために必要だろう。だが、行き過ぎた競技至上主義が上に挙げたような問題を深刻化し、他方で国のスポーツ関連予算を競技力向上に集中させ、地域社会における生涯スポーツ環境の整備を遅らせるといった偏りを生んでいる。また、健康増進の手段としてのみ個人々にスポーツを普及・振興するだけで、果たしてスポーツは人々の日常の実践の中に規範として根づいて行くのだろうか。むしろ国家の発展や健康増進だけではなく、いまスポーツに求められているのは、スポーツが生活に根ざして、人々の社会福祉に資する事が本当に可能かどうかを検討することではないだろうか。メダルの数や健康指標に統計的に表すことの難しい、スポーツと人間のより良い関係性の輪郭を、本研究はスポーツ人類学という方法論的立場によって追求しようとしている。とりわけ、注目するのが地域社会の人々の生活の中にスポーツや遊びが引き起こす力学である<sup>1</sup>。筆者らはそれをまとめてスポーツに内在する「運動力」と呼びたい。これは筆者らが用いる独自の概念であり、スポーツの「運動体」としての在り方と対をなしている。

### 1. 2. 「運動体」としてのスポーツの「運動力」

Sportの語源とされるラテン語のdeportareは、元々

は「運ぶ、持ち去る」という意味だった。それがやがて、「気分を変える(こと)娯楽」、「運動競技」と変化して、今日知られるスポーツという語に発展した事はよく知られている。一方、日本語の「運動」には、狭義の意味での体を動かすことの他にも、目的を達成するために積極的に行動すること(ex.社会運動)や物事がめぐり、変化していくこと(ex.天体運動)などの意味がある。こうして運動には、娯楽、社会変革、自然現象に至るまで、実に多くの文化的性格が付与されていると言って良い。この点で日本語の「御馳走」という言葉に着想を得て展開される岸野雄三の運動観念に対する解釈が興味深い。彼によれば、運動は「身体的に奔走尽力することにつながり、運動は自分の考えを行動に具現する媒介者としての根源的意味をもっている—中略—そして、なによりもまず、この観念は奔走する如実の運動体験を通じて、すなわち身体性を介して、主体的に把握されているのである」(岸野、1973:51)。岸野はこうした運動についての観念が基礎になって、身体運動の文化的機能が現前すると考える。この事をここで扱うスポーツに当て嵌めてみることも可能だろう。

そして、筆者らの考えと岸野の考えを付き合わせれば、運動に基礎づけられるスポーツとは、主体がその身体を通じて別の主体へと働きかけ、自己と他者と社会の関係を把握し続ける営みであると理解する事はできないだろうか。筆者らはこのスポーツに内在する運動の社会的な力学作用を「運動力」と呼びたい。このような運動力を内在させるスポーツは、まさにそれ自体が運動であると同時に別の運動を生み出し続ける「運動体」とも呼べるだろう。そして、運動体としてのスポーツの運動力が主体に働きかけ、その主体がさらに別の主体へと働きかけるという運動の連続を生み出していく。こうした運動体としてのスポーツの運動力が、現実の地域社会にもたらすのが人と人、人とモノ、モノとモノとの結びつきである。運動体は、存在の間に働きかけ、動かし、既存の配置を変更する。このような運動力によって形成される結びつきや関係の再創造こそが今、地域社会に求められている。そして、こうした運動力によってこそ地域社会の「関係人口<sup>2</sup>」は創出されていくのではないだろうか。

また、このような運動体としてのスポーツの運動力を支えているのが、その競争的楽しさとそれに媒介さ

<sup>1</sup> 以降、本稿では「スポーツ」を遊び、武術、舞踊などをも含む包括的な概念として扱っていく。

<sup>2</sup> この関係人口とは、近年の地方創生議論の中で現れてきた概念であり、その地域に住む/住まないにかかわらず、その地域に関心を持ち、関係をもつ人々のことである。

れた協同性の現前であろう。こうしたスポーツの性格は我が国の地域社会においては、より良い生活のための技術として、伝統的なスポーツの中に顕在していたのではなかつたらうか。本研究はそのような文脈の上に、改めて日本の伝統スポーツに備わる文化資源の可能性に着目する。そして、人と社会と伝統スポーツの関係を多角的に再検証することを通じて、文化としてのスポーツの価値を拡張してみたい。

## 2. 目的

本研究は、日本の伝統スポーツの現状をスポーツ人類学的手法で解明し、その文化資源化に向けた理論的視座を構築することを目指した。特に、伝統スポーツの担い手の視点から、彼らの生活とスポーツの実践がどのように交錯し、関係を取り結び、日常的な生の在り方に資するのかに着目した。加えて、「運動力」、「運動体」などの概念枠組みを導入して、人と社会と伝統スポーツの関係を現代日本の地域社会という文脈の上で検討する。そして最終的には対象となる伝統スポーツを過去（歴史）と今（地域性）の相互関係の上に位置づけて、そのスポーツの文化的側面を民族誌（ストーリー）としてまとめ上げていくことを目指している。

## 3. 方法

本研究では、日本の伝統スポーツの中でも、とりわけ地域社会が熱心にその保存と継承に取り組み、現在もその多様性を維持している東北地方の伝統スポーツを対象とした。具体的には、岩手県久慈市山形町（以下、山形町と省略）で行われている「平庭闘牛」と秋田県秋田市（以下、秋田市と省略）で行われている「竿燈」に関するフィールドワークを合計6回実施した。

平庭闘牛については2017年6月10～11日、10月14～16日、2018年2月9～11日の計3回、現地で闘牛大会の参与観察、聞き取り、資料の収集を行った。加えて、平庭闘牛と関係の深い新潟県長岡市山古志村の闘牛についても2017年11月2～3日にかけて参与観察及び関係者への聞き取りを実施した。竿燈については6月23～25日、8月2～6日の計2回、秋田県立大学竿燈会への聞き取りや竿燈まつりでの参与観察などを実施した。

以下に、対象となった平庭闘牛と竿燈の概要を述べ、本研究の論点を整理する。なお、以降の記述において、特に注記のない場合、筆者らのフィールドワークに基づいた情報に依拠している。

### 3. 1. 岩手県久慈市山形町の平庭闘牛

山形町で行われる「平庭闘牛」は「東北唯一の闘牛」と言われている。日本にはこの他、新潟県中越地方、島根県隠岐の島、愛媛県南予地方、鹿児島県徳之島、沖縄県の合計6県9市町村で定期的な闘牛大会が実施されている（c.f. 石川，2009）。日本の闘牛はヨーロッパのような人対牛ではなく、牛対牛で行われる。

闘牛の舞台となる山形町は、旧山形村と旧久慈市が2006年に合併することで誕生したが、闘牛大会自体は山形村時代から行われており、記録に残る上では1960年の「平庭高原つつじまつり」で行われたのが最初であると考えられる。その後いったんは途絶えるが、1983年に農業青年会と村役場が中心となって闘牛会を発足し、再び闘牛大会を開始する。2004年、2009年、2016年には「全国闘牛サミット」（1998年より毎年開催）の開催地ともなり、地元住民や行政の関心も高まりつつある。

大会は現在、わかば場所（5月）、つつじ場所（6月）、しらかば場所（8月）、もみじ場所（10月）と年間計4回開催されている。宇和島で毎年5回、山古志で毎年12回、徳之島で毎年10～15回程度開催されていることと比較すれば、それほど数は多くない。来場者数は700～2000人ほどで推移する。入場料は前売券が1000円、当日券が1200円、中学生以下が無料である。主催者は「いわて平庭高原闘牛会」で、闘牛の取り組みは平庭高原スキー場内に作られた専用闘牛場で行われる。事務局は久慈市役所山形総合支所産業建設課が担当する。事務局には闘牛大会の運営資金として年間60万円の予算が組まれている。なお、先述の入場料収益は大会運営費と地域の畜産振興に当てられる。

大会には平均して20～30頭の牛が参加し、10～15組程度の取り組みが行われる。地元の牛主が所有する闘牛用の牛は約20頭で、その他県外の牛主が所有するのが約15頭であるという。沖縄と徳之島が約300～400頭、中越地方と宇和島が約100頭を保有しているのと比べれば小規模である。なお闘牛用も含め、この地域全体の畜産農家が飼育する牛は約200～250頭ほどである。そもそも、この地方は「短角種」と分類される肉牛の生産地として知られており、闘牛を行うのもこの「短角牛」である。従順で我慢強く、体格の良い短角牛は闘牛に向いているともいわれる。中越地方で闘う牛はその多くが山形町生まれの短角牛で、両地域間の牛の需給関係は長い歴史を持っている。

ルール上の特徴として、平庭闘牛では原則勝敗をつけない。隠岐の島、徳之島、沖縄などでは一方が相手に背を向けて敗走し、勝負が決まるまで時間無制限で

行われる。対照的に中越地方と山形町では、全ての取り組みにおいて、一方が優勢になった時点で引き分けにする。勝負に割って入り、引き分けに持ち込む重要な役割を担うのが勢子と呼ばれる牛の世話役である。

日本の闘牛にはどこでもこの「勢子」と呼ばれる牛の世話役がいる。世話役とはいえ、勢子は勝負が始まれば牛をけしかけ、闘いの情勢を見極め、取り組みの場をコントロールする、競技に不可欠なゲームプレーヤーである。勢子は牛主自身であることもあれば、牛主から特に指名された人物であることもある。平庭闘牛に関して言えば、牛主/勢子かつ畜産農家/勢子である場合が多い。これは、他の多くの地域の闘牛と異なる側面として分析の対象になる。例えば、宇和島の闘牛の場合、牛主の職業は農業や畜産業だけでなく建設業、飲食業、会社員など様々である（うわじま闘牛 HP）。ただし、近年は上述した県外の牛主や共同牛主も増えてきている。彼らは飼料代などを支払って、自身の牛を畜産農家に預けるのである。

以上が、平庭闘牛の概要となる。日本の闘牛全体の中では歴史が浅く、その規模も小さいことがわかる。他方、闘牛をする牛は黒毛和種ではなく、この地で昔から飼養されてきた短角種で、この短角種は中越地方を筆頭に今では他の闘牛大会でも活躍している。山形町の闘牛の「素牛」供給地としての意義は大きい。また、供給地として他の闘牛地域と形成されたネットワークは、闘牛サミットなどを通じて益々発展してきている。こうして旧山形村から続く伝統は久慈市との合併後も続いてきており、2016年には「平庭闘牛文化：牛の角突き」として久慈市の無形民俗文化財となった。地域の観光資源としても注目を浴びつつあるといえるだろう。

### 3. 2. 秋田県秋田市の竿燈

秋田市で8月3～6日に行われる「竿燈まつり」は、国指定の重要無形民俗文化財として知られる。この祭りは「東北三大祭り」の1つであり、秋田を代表する観光資源として約130万人もの人々を集める。県外での演技の機会が増え始めた1950年代頃から、全国的に知られるようになった。観光客の増加に伴い、かつては夜のみ行われていた竿燈まつりは、「昼竿燈」や「竿燈妙技会」（以下「妙技会」と略す）という技を競う大会を増設し、その規模を次第に拡大して行った（堀田、1967；飯塚、2008）。

竿燈には竿燈を操る5つの技があり、先の妙技会では、これらの技の出来栄えや笛1名と太鼓2名で構成された囃子方の演奏技術が競われる。妙技会は、竿燈

には大若団体規定、小若団体規定、大若団体自由、大若個人が、御囃子には囃子方、小若囃子方のカテゴリーがあり、それぞれ竿燈の重さや竿の長さ、年齢、技の制限、個人か団体かなどで区別されている。竿燈、囃子方ともに、いわゆる採点競技方式で審査員に評価され、得点が高いと予選を勝ち進み決勝に進める。

竿燈まつりは「秋田市竿燈会」により運営・統括されるが、この組織は通称「町内」と呼ばれる伝統的な地域社会を基盤とする各竿燈会により構成される。先述の通り竿燈の技や囃子は妙技会において標準化されているが、町内ごとにそれぞれ特色があり、その違いが竿燈まつりを魅力的なものとしている。竿燈まつりには38町内が参加するが、これに加えて現在では通称「企業竿燈」と呼ばれる各団体も参加する。企業竿燈はその名の通り、主に秋田市内で活動を行う民間企業や学校、行政機関により結成される竿燈会である。その数は36団体を超過しており、町内と変わらぬ数の企業竿燈が竿燈まつりに参加し、盛り上げる（「秋田竿燈まつり」HP）。本研究で筆者らが対象とした「秋田県立大学竿燈会」（以下、「県大竿燈会」と略す）も、このような企業竿燈の1つである。

県大竿燈会は、2001年に結成された竿燈会である。その名の通り、秋田県立大学（以下「県大」と略す）を拠点とした学生による大学公認サークルである。竿燈まつりに参加する大学の竿燈会は全部で4つあるが、その構成員は大学によって様々だ。例えば、最も古株の秋田大学竿燈会は、その構成員のほとんどを大学の教職員で占める。対して、県大竿燈会の構成員はそのほとんどが結成時より学生であり、それが後に示す県大竿燈会の特徴にもなっている。

県大竿燈会は、2001年9月、当時3年生であった県大1期生2名と教員1名を中心に結成された。コンタクトを取った県庁竿燈会からは、「伝統ある祭りだから中途半端な気持ちでやるならだめだ。やるのだったら1年で妙技会に参加できるようにならない」といった厳しい言葉があったが、彼らは決意を固めメンバー集めを開始する。2001年末からは県庁竿燈会の竿燈や太鼓を借り、指導を受けつつ本格的な練習が開始された。2002年4月の入学式での出竿を目指した彼らは、学生という立場を活かし、通常の町内竿燈会がまつりの1か月前から練習をするところを、他の部活動のように毎週練習を行った。「すべての技を習得するには3年かかる」といわれている竿燈の技を7か月で習得、2002年夏の竿燈まつり時には総勢57名となり、県庁竿燈会との合同で出竿、妙技会への出場も果たした（秋田県立大学竿燈会編、2007）。

2004年の妙技会大若団体規定で決勝戦に進出を果たすと、2008、2009年にはついに大若団体規定で準優勝、そして2010年には大若団体自由、囃子方、大若個人でそれぞれ優勝を果たす(秋田県立大学竿灯会編, 2012)。囃子方に関しては、2013年から2015年まで3年連続で優勝(秋田県立大学竿灯会編, 2016)、さらに我々が調査を行った2017年にも優勝を果たした。

以上が、竿燈まつりと県大竿燈会の概要である。歴史はまだ浅いものの、すでに竿燈まつりに欠かせない存在となっている。実際、2013年からの囃子方での連続優勝は、妙技会における囃子の評価基準にも大きく影響を与えているという話も聞かれた。また、多くの町内竿燈会が若者不足に悩む一方、毎年60名を越す若い学生メンバーで構成される県大竿燈会は、竿燈まつりに勢いをもたらしている。彼ら自身「自分たちが1番うるさいです。それを目指しています」と話すように、彼らの演技周辺は活気があり、遠くからでも県大竿燈会が演技している場が分かるくらいである。そして、このような県大竿燈会の在り方は町内からも受け入れられ、また観光客たちも勢いある彼らを好意的にみている。このことは、秋田を代表する観光資源としての竿燈まつりを活性化させる要因の1つであることは間違いないだろう。

## 4. 結果及び考察

### 4. 1. 平庭闘牛

#### 4. 1. 1. 闘牛がつくるネットワーク

現在、平庭闘牛は大きく2つのネットワークを形成している。1つは歴史的に続く闘牛の素牛供給地として、山形町と日本各地の闘牛会、勢子、牛主とを結びつけている。もう1つは地域の観光資源として、山形町と観光客とを結びつけている。そして、これら2つのネットワークを形成することで、当地の畜産業の核となる短角牛の振興に一役買っている。

予てより関係のあった新潟中越地方との需給関係に加えて、闘牛サミットによって促進された全国的ネットワークにより、今や山形町で生まれた短角種闘牛は遠く徳之島や沖縄で活躍している。牛の行き来だけではなく、勢子や牛主の交流も増え、それに伴って各地の闘牛文化が伝播し合い、場合によってはそれによる変容も生じていた。

他方、肉牛としての短角牛が取り持つネットワークが闘牛大会の開催を支えてもいた。ある消費者団体とこの地の畜産農家たちとの交流が、安定した短角牛の価格を保証し、経営を助けるとともに、闘牛を育てる

余地を与えていたのである。

以上のように、闘牛の生み出す「運動力」が勢子、牛主、畜産農家、消費者の地域を超えたネットワークをつくり、地元住民や自治体職員の関与を促した。かつて石川はこうした牛を介した関係を「牛縁」と定義した(石川, 2009)。近年、平庭闘牛はこのような牛縁を積極的に地域の文化資源とみなすことで、関係人口の創出へと発展させつつあるといえるだろう。

#### 4. 1. 2. 闘牛が媒介する人(文化)と牛(自然)の関係

さらに、平庭闘牛が媒介するのが人(文化)と牛(自然)が繰り返す共生のモデル(物語)である。短角牛という存在は昔からこの地域の経済とアイデンティティを支える要である。山形町の人々にとって、短角牛は娯楽の対象であると同時に仕事の対象でもある。この地の畜産農家は牛主であり同時に勢子である。また、牛主は同時に短角牛を食べる消費者でもあるかも知れない。ある畜産農家/勢子は筆者らに「肉牛は死んで価値を持つが、闘牛は生きて価値を持つ」と述べた。この言葉に一方だけを否定し、一方だけを肯定する態度は認められない。であれば、肉牛/闘牛と生活する事はもしかしたら、牛を生産の対象とのみ扱うのではなく、自然として遠ざけてしまうのでもなく、人と牛が人牛一体のハイブリッドとして生きるという倫理的実践なのではないだろうか。このような人と自然の関係の結び方は、運動体としての闘牛の運動力の下に継承されてきた知恵の1つであるかもしれない。

### 4. 2. 竿燈

#### 4. 2. 1. 竿燈がつくるネットワーク

県大竿燈会の事例からは、ローカルな地域社会におけるネットワークが浮き彫りになる。この地域社会の人々とは、町内、企業竿燈、また竿燈に関わるモノを生産する人々である。そのような人々とネットワークを形成するのが関係人口としての県大竿燈会であるといえる。というのも県大に限らず、全国の大学にはその土地に何の縁もなく、進学のために居住することになる学生が多くいる。それらの学生の大半は、ほとんど地域社会との関係性を築くことなく、大学を卒業しその土地を離れていく。地域社会からみれば、彼らは一時的に土地を訪れた「よそもの」である。そのような中で、県大竿燈会のメンバーは県大竿燈会への入会をきっかけに、竿燈の運動力を媒介にして地域社会との繋がりを得る。県大竿燈会では、竿燈に熱中する人々を「竿燈バカ」と揶揄するが、2016年の時点で178名の「竿燈バカ」が卒業しているのだ。彼らの中

には「竿燈バカ」であるが故に、県内で就職を決め町内や企業竿灯に参加し、秋田に残り続ける者や、「燈和会」という県大竿燈会 OBOG により結成された竿燈会に所属し、竿燈まつりに参加し続ける者たちもいる。竿燈に直接関わらない OBOG たちも、毎年竿燈まつりを楽しみに秋田に戻ってくる。さらに、「よそのもの」であることは、仕事として秋田にきた教職員たちも変わらない。設立時より差手として関わる鈴木英治氏（現・県大教授）は県大竿燈会を「秋田で暮らしたことの証。竿燈を通じて生まれた、多くの人との出会い」（秋田県立大学竿燈会編，2016：93）と表示しており、筆者らにも竿燈を通じて地域社会との繋がりを得たことを語ってくれた。

伝統的な地域社会との間に関係性を築きにくい現代において、「よそのもの」である県大竿燈会は竿燈という運動体の運動力を媒介に、自らを関係人口へと変換させていると言えるだろう。

#### 4. 2. 2. 「よそのもの」の竿燈による地域社会の再編成

竿燈まつりは、1966年頃から伝統的な町内だけでなく、外、すなわち「よそのもの」の参加を受け入れてきており、県大竿燈会の参加は他の企業竿灯と違いはない。しかし、年間を通じて行われる練習による短期間での技術向上、若さが持つ勢い、そしてそれらが結実したことによる近年の妙技会における活躍は、県大竿燈会の竿燈を他の企業竿灯とは一目を置く存在としている。そして、そのような県大竿燈会のメンバーは「竿燈バカ」として、卒業後に今度は町内を支えるメンバーともなっている。

このような県大竿燈会の存在は、地域社会の再編成を促していると言えよう。その土地に残り、竿燈を続けることを選んだ「竿燈バカ」の存在は、過疎が進む地方都市の伝統的地域社会の活性化を担う。しかし、ここでいう再編成とは、そのような人々の動きだけではない。それは県大竿燈会の行い、そして魅せる竿燈の持つ即自的な力も関係するのではないか。従来は町内以外の企業竿灯が妙技会において優勝するのは困難であり、伝統的な技を継承する町内が優勢であった。しかし、そのような中で県大竿燈会は躍進する。その中で、彼らがみせる竿燈の技が、「かっこいい」「県大の竿燈、いいね」といった感情を生み出し、人々に感動を与えることにより、町内にも影響を与え、より活発な技量の向上が生まれているはずである。このような動きは地域社会の在り方を少しずつ動かすものであり、再編成に繋がる動きではないかと考えられる。「よそのもの」たちによる竿燈が、竿燈まつり全体の関係性を少しずつ、変えていくようなきっかけを生み出して

いるのである。

## 5. まとめ

本研究から、平庭闘牛と竿燈という伝統スポーツの生み出す運動力が、当該地域に新たな関係の網の目を形成させていることが明らかになった。それらは、都市と地方を結び、移住者と地元民を結び、人と自然を結んでいく。現在の日本社会においても、伝統スポーツは人と地域社会を媒介し、関係を取り持つ力学を失ってはいない。むしろ、人がそのように伝統スポーツを捉え直すことによって、その文化資源的可能性はさらに拡張していこう。スポーツ人類学的手法によって、こうした社会に対するスポーツの捉えがたい作用を民族誌（ストーリー）として具体的に提示することで、文化としてのスポーツが我々に与える潜在力とその価値をますます可視化していくことができるに違いない。

### 【参考文献】

- 秋田県立大学竿燈会編（2007）秋田県立大学竿燈会五年史。秋田県立大学竿燈会。
- 秋田県立大学竿燈会編（2012）秋田県立大学竿燈会十年史。秋田県立大学竿燈会。
- 秋田県立大学竿燈会編（2016）秋田県立大学竿燈会十五年史。秋田県立大学竿燈会。
- 飯塚喜市（2008）秋田「祭り」考。無明舎。
- 石川菜央（2009）日本の闘牛。家畜の文化（秋篠宮文仁・林良博編，岩波書店：117-128。
- 岸野雄三（1980）体育史。大修館書店。
- 堀田正治（1967）秋田のねぶり流し 竿灯の歴史。太陽印刷株式会社。
- 山形村誌編さん委員会（2009）山形村誌第一巻民俗編，久慈市。

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。

